
<書 評>

堀尾重治（九州厚生年金病院放射線科・主任技師）

骨・関節 X 線写真の撮りかたと見かた

杉岡洋一（九州大学教授）

本書の序文を書いておられる片山仁 順天堂大教授と私は 同級生で九州厚生年金病院でインターンをした仲間である。当時の九州厚生年金病院は整形外科を主体とした近代的で漸新な総合病院で、著者の堀尾氏は放射線技師として勤務されていた。図抜けた勉強家でありまた画が上手な方であった。偶然のことから医学書院より本書の原稿について検討を依頼された。最初は実を云ってありきたりの原稿であろうと高をくくっていたのだが、内容は撮影法の詳細な記述もさることながら、撮影部位の代表的疾患のX線像を呈示しながら、疾患、部位により要求される撮影のポイントが克明にしかも簡潔に描かれているのを知り、互に求められ求めえなかった得がたい本になる

ことを確信した次第である。

私も整形外科医としてこの患者のこの関節のこの部位がみたいと、Meschan の An Atlas of Normal Radiographic Anatomy を持って放射線科の技師室に出入りし、注文をつけることがしばしばである。九大の整形外科教室も以前は独自の建物に専用の手術室、X線撮影室をもっており非常に綺麗な、しかも目的にかなった立派な写真が得られていた。最近では中央化され、骨・関節の撮影の専門家はなく、すべてではないが一般的には程度の低い写真で満足せざるを得ないといった弊害が表面化して来ている。極言すれば（X線撮影の）中央化は消化器から呼吸器、骨まで何とか間に合わせの写真は撮影出来るが、専門家としての自

負は失われ、育たなくなったといえる。また撮影を依頼する医師は指示箋に部位を記入するだけで目的とした情報が如何に、どの様な撮影法により得られるかを考えもしない人が多くなった。これでは目的としたX線写真が得られる訳がないと、回診で痼癭玉を破裂させることがしばしばである。

本書には著者自身が工夫考案された疾患固定器と撮影用補助具も紹介されており、放射線技師の方々の日常の診療に極めて有益な座右の書であると同時に、むしろ整形外科医やこれを志す医学生にすすめたい、また開業されている先生にはコンパクトで便利な本であろう。私は教室の若い整形外科研修医にぜひ読ませたい本と思って2冊を購入し各病棟に常備するつもりでいる。立派な内容もさることながら、整形外科医でない堀尾さんの永年の努力が音を立て、聞こえて来るからでもある。

（B 5，頁 186，図 288，1986，
¥ 4,500，〒300，医学書院 刊）